

ダムの尊厳死に関する便益計測

豊橋技術科学大学 正員 平松登志樹

1. はじめに

肥田野 登¹⁾は幸福空間の条件として存在物の尊厳の最大化を取り上げる。存在物とは人間のみならず、生物、人工物までを範囲とし、また、その存在物が存在する前から死にいたる過程、そしてその死後の時空間まで対象とする。本研究では、存在物の中で「生まれてこなかったほうがよかった」かもしれないダムをとりあげ、その尊厳死に関する、筆者の感じ取る便益について、肥田野のモデルを当てはめて計測する。本研究はダムの尊厳死に関する社会的な便益を計測する前段階の研究である。他人に便益を表明させる前に、自省（自分を見つめる）観点に基づき自分の便益を表明する。

2. 存在物をどこまで拡張するか

肥田野のモデルにおいて、存在物をどこまで拡張できるか。肥田野は、拡張できるものなら拡張していけばいいが、その存在物の意思決定は尊重するという前提である。人によって尊厳を感じ取る存在物は異なるだろう。さて肥田野のモデルをダムに適用する。ダムには、湖のようなダム景観、洪水の減少、水需要の増大に対処できる、不況対策を脱する所得増大効果などの便益はあるとされてきたものの、海の浜の消失²⁾、自然環境の悪化（失われる自然の川の景観、生態系への悪影響などを総合的に考えると水環境の悪化といえる）、コミュニティの分断などの大きな不便益もある。また水が少なくなった時には泥やコケのついた岩肌がみえて醜い景観がもたらされること³⁾、水がなくなったら川底から粉塵被害がでること⁴⁾、ある一定の確率の洪水にしか対応できないこと³⁾、水使用量の増大に伴う効用は幻想であること⁵⁾が指摘されている。また不況対策のために所得増大をもくろむ公共事業を実施するといっても、人は貨幣をためつづける便益（守銭奴的な貨幣愛）⁶⁾があつて、必ずしも不況脱出につながる「消費性向の高い人⁷⁾の所得上昇」がもたらされるとは限らない。失業者や低所得者層でも、将来が不安などの理由により、金を貯めつづけること（これを「守銭奴」の経済学と呼ぼう）に陥り必ずしも消費性向が高いとは言えない可能性がある。その結果ダムなどの公共事業をおこない失業者や低所得者の仕事を作り出しても不況を脱することができなく、かつ国民全体の所得向上にはつながらない可能性がある。

キーワード ダムの尊厳死、尊厳の最大化、便益計測
連絡先 〒441-8580 愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1-1
豊橋技術科学大学 総合教育院 TEL : 0532-44-6952
FAX : 0532-44-6947 e-mail : tora@las.tut.ac.jp

このように従来言われる便益にも疑わしい点があることが判明してきた。また農業用水の都市用水や工業用水への転用に関する研究が進めば、日本に戦後多くのダムがつくられなかっただろうという意見もあり⁸⁾、生まれてこなければよかったダムの存在が窺われる。

3. 性悪の便益

肥田野のモデルとは対極にある存在物の尊厳を踏みにじる性悪の便益もある⁹⁾。例えば地位や権力を利用して部下の教官や学生に嫌がらせをするアカデミックハラスメントの便益がある。である。これらのいじめはその対象を人間から自然や環境そして人工物に拡張できる。

機能不全に陥ったダムを存続させることは、ダムに対する性悪の便益をもたらす。「くだらないもの」をつくりつづけた、うまれてこなければよかったものを国民の目に目にさらしつづける苦痛をダムに与えることになる。ダム本体のみならず、ダム開発に携わる技術者やダム推進を掲げる行政へも「おろかな行為」という罵倒の便益が発生する。巨大なコンクリートのかたまりをつくることに人類の科学技術の偉大さを感じ取り、陶醉し、男のロマンなるものを感じ取る人、そして、そういう環境支配や破壊の便益を感じさせる類の科学に批判が集中する。自然とのコミュニケーションを拒絶し（環境アセスメントの不備）、環境を支配・破壊しようとし、自然の尊厳を踏みにじる便益も性悪の便益であり、またダムという人工物やそれを生み出した人間や科学の尊厳を踏みにじる便益も性悪の便益である。筆者の設楽ダムやハツ場ダムに対する性悪の便益はダム地の寒狭川や吾妻川保全のWTP¹⁰⁾ (Willingness to Pay) 各々 100万円 (2009年価格) より低く20万円 (2010年価格) である。なおダムによる失われる自然の川の存在価値の筆者のWTA¹⁰⁾ (Willingness to Accept Compensation: 受入補償額) は500万円 (2010年価格) でありプラスの性悪の便益を考慮しても全体としては480万円補償されなければならない。

ダム反対グループの批判の脳を刺激する便益は、ダム反対側の訴訟計画（一種のゲーム）の便益につながり、訴訟の論戦の便益も派生する。ダム反対グループ内のMLでの討論も知的なゲームのようであり、この参加への筆者のWTPは10万円 (2010年価格) である。こうした脳の知的な刺激の便益が発生する一方で、ダム地ではコミュニティの分断の不便益も発生する場合が多い。この心理的被害については、仮にダムが中止になった時でも補償されなければならない。コミュニティ分断を含

む全補償額の算定については、CVMによる住民によるWTAの的確な表明が必要条件となる。我々はCVMによるWTAの自由回答額表明という作業にも慣れていかなければならない。従来の研究ではWTAよりWTPによる計測が望ましいとされる¹⁰⁾。過大推定になること、我々は所得制約下でお金を支払うという行為が多いことの理由から、環境の権利想定問題を別に考えるとすれば「いくらもらって移転しますか」と訊くより「移転をするのをやめてそこで生活するためにいくら支払うか」と訊ねた方がいいとされる。しかし筆者はWTAも的確な表明がなされるものと考えている。所得増大が幸福の条件と直結しないこと、「守銭奴」の経済学が幸福条件を満たさないことに人々が気づいてきたと思われるからである。

4. ダムの尊厳死—安楽死

ダムはポックリ¹¹⁾ 逝ったほうが望ましい。即座に安楽死させるべきである。生まれてこなかったほうがよかった人工物であっても、その尊厳を重視すべきである。ダムへの性悪の便益が仮に大きいとしても、ダムの立場に立てば苦痛で耐えられないだろう。性悪の便益は通常のコスト便益分析に取り込めない。下手をすると大きな性悪の便益をもたらす大震災や凶悪犯罪を奨励することにもなりかねないからである。

どうせやるなら、機能不全のままダムを存続させるよりも、元の自然に戻す学問分野を充実させて、またもとの自然に戻す公共事業の仕事をつくった方がよい。それよりもよいのは、生物発電システムのように、人々の消費の活性化が期待できるような環境財を模索することである。無論、生物発電¹²⁾ や風力発電などの自然エネルギーによる町づくり¹³⁾ などへの市民の支出は、結果としては失敗に終わるかもしれない。しかし町づくりのプロセスにおいて、筋書きのないドラマの便益を感じることができる。従来の「固体相の理論」に基づくダム開発よりも液体相、気体相¹⁴⁾ の計画に社会は興味を持つだろう。また設楽ダムのように、ダム開発に3000億円かかるのだったら、国立大学法人の職員に1人あたり3億円退職金代わりにお金を配りベンチャーに期待してもよい。国立大学法人、そして国立大学法人の職員1000人のリストラ・安楽死が達成され、またいくつかはベンチャーが成功するだろう。このような筋書きのないドラマによる雇用創出も期待してもよいだろう。このケースもかりに失敗したとしても、筋書きのないドラマのプロセスの便益は発生する。結果としては失敗した太陽光パネルの営業などをまわった学生社長育成において、筆者のそのプロセスの便益は100万円(2001年価格)¹⁵⁾ であった。起業は人生の一種のゲームのようであり、失敗したからこそゲームのプロセスの便益を評価

できた。海外へは水環境計画というパッケージ¹⁶⁾ を輸出することが大きな水ビジネスになるであろう。地下水の浄化や排水処理施設の充実と高料金価格体系を内包した、水資源利用計画と水環境計画はどの国もほしが「地域計画財」である。水環境計画とは川や海における親水性の維持形成、例えば浜辺の形成や水質改善による親水空間の形成をもたらす水環境計画をもちこんだパッケージを輸出することは有望で大変楽しいビジネスである。水需要が増大するから、汚染された(あるいは、将来汚染であろう)地下水を放棄させ、ダム技術を輸出するという単純な固体相のビジネスでは、いずれ近い将来ダムによる外部不経済が発生して、その結果輸出先から恨まれるだろう。

参考文献

- 1) 肥田野 登(2004)、拡張自己概念からみた都市の公共空間—幸福空間をめぐる断想、今田高俊、金泰昌編、公共哲学13—都市から考える公共性、東京大学出版会、pp. 215-239
- 2) 青木伸一、研究紹介(2010-2011)、国立大学法人豊橋技術科学大学、p. 153
- 3) 今本博健、『週刊SPA!』ダム取材班(2010)、ダムが国を滅ぼす、扶桑社
- 4) 藤田恵(2010)、国を破りて山河あり、小学館
- 5) 平松登志樹(2010)、マーフィーの法則に基づく筋書きのない人生のドラマの便益、土木学会第65回年次学術講演会講演概要集
- 6) 小野善康(1992)、貨幣経済の動学理論、東京大学出版会
- 7) 小野善康(1998)、景気と経済政策、岩波書店
- 8) 岡本雅美(2009)、華山謙の未完の航跡、環境と公害、第39巻、第1号、岩波書店 pp. 44-49
- 9) 平松登志樹(2010)、性悪の便益と環境、日本民俗学、No. 264, pp. 165-171
- 10) 肥田野 登(1999)、環境と行政の経済評価、勁草書房
- 11) 松崎憲三(2007)、ポックリ信仰—長寿と安楽死祈願、慶友選書
- 12) 平松登志樹(2010)、生物発電システムの将来像、第38回環境システム研究、pp. 459-461
- 13) 風見正三、山口浩平編著(2009)、コミュニティビジネス入門、学芸出版社、pp. 26-27
- 14) 今田高俊、金泰昌編(2004)、公共哲学13—都市から考える公共性、東京大学出版会
- 15) 平松登志樹(2001)、学生社長育成プロセスに対するCVM、土木計画学研究・講演集No. 24(2), pp. 813-816
- 16) 小宮山宏、TBSテレビ(2010.12.23, 9.55-10.50)、ふるさとエコ革命